

氷の魔法少女は魔族幹部の執着熱に甘く溶かされる

目次

第一章	溶かされる氷——3
第二章	魔族幹部ルド——40
第三章	逃げ場のない抱擁——53
第三章 I F	相棒に犯される——83
第四章	放課後の教室で——113
第五章	蜜獄の罠——141
第六章	終わらない鬼いっい——186
第七章	甘い雪解け——249

第一章 溶かされる氷

「お願い！間に合って！」

大学からの帰り道、突然感じた魔族の気配。

白石雪花、魔法少女スノウは変身し、住宅街の屋根の上を跳び移りながら気配の先へ急ぐ。

魔族の気配がするのは、スノウの親友であり仲間の魔法少女でもあるフローラが帰って行った方向だ。

スノウが跳ぶたびに、白いケープのフードが揺れて、雪の結晶が舞い散る。

「スノウ！とてつもなく邪悪な気配がする。フローラが交戦しているみたいだが、いつまで持つか分からないぞ！」

スノウの相棒、パウが叫んだ。白いクマのぬいぐるみのような姿。その愛らしい顔は、今、緊張感に満ちている。

スノウはまだ魔法少女になったばかり。戦った回数も数えるほどだった。

それでも親友が危険な目に遭っているならば放つてはおけない。

「……フローラ！」

ようやく気配の中心に辿り着き、地面に降り立った瞬間、スノウ

の目の前に広がったのは、絶望的な光景だった。

地面にフローラが倒れている。身体のあちこちに傷があり、魔法服の一部が破れてしまっている。

その目の前にはスノウの身長の上の二倍以上の高さがある、巨大な狼の魔物がいた。その狼のような魔物は立ち上がった状態で鋭い牙と爪を光らせている。

「スノウ、来ちゃダメ……！こいつは……」

スノウに気がついたフローラが震える声で何かを伝えようとしている。しかし、最後まで言い終えることもできず、フローラは意識を失った。

「フローラ！！」

スノウは駆け寄り、フローラを抱き起こす。フローラはぐったりとしたまま目を覚まさない。

「……誰？新人の子？」

スノウはハッと顔を上げた。狼の魔物の背後に誰かが立っている。

黒髪に深い緑色の瞳。おとぎ話の世界から切り離されたかのような、美麗という言葉が似合う青年だった。

その瞳は傷ついたフローラを憐れむように見つめているが、その

奥には感情の欠片も存在しない。

スノウは直感的に悟る。スノウとパウが感じたあの邪悪な気配の発生元はこの青年だったのだと。この青年に比べれば、目の前の狼など小物だ。

「退いてくれる？ 今、その子の魔力の核を貫うところだから。」

青年は心底面倒くさそうに言った。

「ダメ！」

スノウは叫び、腕の中のフローラをより強く抱き締める。

「…そう、じゃあ仕方ないね。その銀髪の子も適当に片付けといて。」

「

その言葉を合図に目の前の狼が動き出す。目にも止まらない速さでスノウの目の前まで来て、鋭い爪を振り下ろしてきた。

（避けられない！このままじゃフローラにも当たっちゃう！）

スノウは咄嗟に冷気を放った。

親友を守りたい。その思いがスノウの魔力に火をつける。

——パキイイイイイイン！！

スノウを中心に爆発のような冷気が放たれた。辺り一面が凍りつき、目の前の狼は、爪を振り下ろそうとした体勢のまま、完全に固まってしまっている。

「はあ……、はあ……。」

スノウはフローラを地面に横たえて、青年の前に立ち塞がった。

「これ以上、フローラには手を出さないで！」

青年は少しの間、スノウをじつと見つめていた。それから、自分の凍りついた指先を眺める。

「……驚いたな、まさかここまでやれるなんて思わなかったよ。」

青年は怒りを見せるどころか楽しげに笑った。軽く手を振って氷を霧散させる。

「君、名前は？」

「……………！スノウ……………」

「そう、スノウか。僕はルド。魔族の幹部をやってる。」

（魔族の幹部！？）

スノウは青年の正体を聞いて青ざめる。ルドはそんなスノウを気に留める様子もなく、地面に伏したフローラを一瞥する。

「いいよ。その子逃しても。ほら、そこのクマに頼みなよ。」

（フローラのこと、諦めてくれたの？）

スノウは一瞬戸惑ったが、何にしてもフローラをこの場から離れさせるチャンスだ。スノウはパウを見つめ、叫んだ。

「パウ！フローラをお願い！」

パウは転移魔法が使える。しかし、それは万能なものではなく、せいぜい一日に一度使うのが限界だった。

その一回の切り札をスノウは迷いなく、親友を救うことに使おうとしていた。

「スノウ：分かった！死ぬなよ！」

パウはスノウの意図を瞬時に汲み取り、頷いた。パウとフローラの姿が消える。

「…さてと、スノウ。」

スノウは指先に冷気を纏わせたまま、一步下がる。この青年が本当に魔族幹部ならばスノウが敵う相手ではない。逃げ出さなければ。

スノウがじり、ともう一步後ろに下がろうとした瞬間、スノウの足元の影が膨れ上がり、巨大な獣の輪郭を形作った。

「ひっ……!!？」

スノウが悲鳴を上げる間もなく、影から現れた漆黒の狼が、その筋骨逞しい前足でスノウの華奢な体を包み込んだ。

「…離して！」

スノウは残った魔力をかき集めようとするが、爆発的な魔力を放った後で、魔法がうまく放てない。指先から出た冷気が狼の毛を白く凍らせるだけだった。

「無駄だよ、スノウ。その子は一度捕らえた獲物を、僕の許可なく離したりはしない。」

ルドの落ち着いた声が響く。狼は、スノウの脇の下から前足を通し、スノウを羽交締めにする。さらに、獣の重厚な胸板が結衣の背中に隙間なく密着し、逃げ場を完全に塞ぐ。

「……っ！嫌っ！」

スノウが必死にもがくたびに、狼の影の腕はさらに硬度を増し、彼女の柔らかな肢体を締め上げる。

ルドはふわりと宙に浮き、スノウの目の高さまで上昇した。

深い森のような緑の視線に囚われ、スノウは小鳥のように震えた。

（終わりだ！魔族幹部に捕まった魔法少女の運命なんて決まってる
！）

スノウは致命的な一撃が来ることを覚悟してぎゅつと目を閉じた。
だが、予想に反して、スノウの耳元で聞こえたのは柔らかな声だ
った。

「……そんなに震えなくていい。命を取るつもりはないから。」

次の瞬間、スノウの頬に、ルドの細い指先が触れた。

「ひ……っ!？」

スノウの肩が大きく跳ねる。

その指はスノウを傷つけるどころか、羽毛で撫でるような優しさで、こめかみから顎のラインへとゆつくりと滑り降りてきた。

「えっ? あっ……? 何……っ?」

スノウは自分が何をされているのか理解できず困惑した。

（触られてる? なんて?? 殺すか、魔力の核を奪うか。魔族幹部が魔法少女にすることなんてどちらかのはず…それともこれにも何か

意味があるの？)

ルドの指先から、湿り気を帯びた熱が伝わってくる。頬や首筋をなぞるたび、ゾクゾクとした感覚が迫り上がってきた。

「……………っ、殺さないの？」

「殺す？そんなことしたらもつたいないじゃないか。」

スノウの細い腰のラインをルドが指の背ですつとなぞる。

「んんっ！」

スノウは思わず声が漏れそうになる。

「ふふつ、いい反応だね。」

ルドは笑いながら腰から脇にかけて何度も指で撫でる。

「あつ！んっ！ああつ……！！」

スノウの喉から甘えるような声が出てしまう。

スノウは絶望的な事実を理解した。この魔族幹部はスノウを生かしたまま、飽きるまでこの悪趣味な遊びを続けるつもりなのだ。

「可愛い声が漏れてるよ、スノウ。殺されるって思った相手から触

れられるのはそんなに気持ちがいいのかな？」

「ちがう！そんなんじゃない…あつ！」

腹を撫でていた指が胸元まで上がってきて、胸の膨らみを手で包むように撫でる。

ルドの細く長い5本の指が膨らみの中心に向かってなぞるたびゾクゾク、ゾワゾワとした感覚が襲いかかる。

動いているか動いていないのか、ミリ単位でスノウの肌を味わわれるような感触に、スノウは子供がイヤイヤするかのように頭を振る。

「嫌だ！そんなところ触らないで！」

スノウは最近、ずっと思いを寄せていた相手と恋人になったばかりだった。ルドが蹂躪しているのは、その恋人にすらまだ触られたことはない場所。初めて会った相手、それも倒すべき敵に触られるなど、許せるはずがなかった。

ルドの指先から逃れようとすがすが、狼の魔物に固定された身体は動かない。

「ふふつ、そう言われるともつと触りたくなるな。さつきからひつきりなしに声を出して、君も嫌そうには見えないし。」

ルドは胸の中心、スノウの魔力核がある場所を服の上から撫でた。

「ひあっ！んん……っ！」

生理的な恐怖と、ルドの指が引き起こす快楽が混じって声を漏らしてしまう。

「あーあ、敵にちよつと撫でられただけで顔を真っ赤にして身体を熱くして。氷の魔法少女が形無しだね。」

「ひどい……！なんでこんなこと！」

「なんでって、うーん……面白いから？嫌なら抜け出してごらん？まあ無理だと思うけど。」

ルドはそう言いながら、スノウの胸の頂を爪で軽く掠めた。

「はう！」

その刺激だけで、スノウは肩を大きく跳ねさせてしまう。

「純度が高い、澄んだ魔力だね……とてもいい。」

ルドはスノウの胸元、その奥にあるスノウの魔力の核をじつと見据える。

「どこから壊してほしいかな、スノウ。君の意識は、一度にたくさ

んの刺激を処理できるようには作られていないはずだけど。」

ルドの左手が、スノウの白いうなじに這い上がる。細い指先が、汗ばんだ後れ毛を弄り、敏感な耳裏をわざとらしく、ゆつくりと愛撫し始めた。

「ひっ、あ……っ！……んんっ！」

首筋をなぞる熱い感触。スノウがその不快感から逃れるように顔を背けようとしたその瞬間。

「……っ！？」

スノウの身体が、電流を流されたように大きく跳ねた。

ルドの右手が、スノウの抵抗を嘲笑うかのように、スカートの中へと滑り込んで、太ももをじつとりと撫で上げたのだ。

「どこを見ているんだい？ 上ばかり気にしていると、下が疎かになるよ。」

ルドの左手が耳朶をなぞり鋭い刺激を脳に送る。スノウの思考が耳の刺激に気を取られた隙を突き、スカートの中の右手が、予測できないタイミングで、スノウの最も無防備な場所を布地越しに弾いた。

「んんッ！？ な、に……いまの……っ！」

「おや、いい反応だね。次はどこに来るか、当ててごらん？」

ルドの愛撫は、あえてリズムを刻まない。

鎖骨をなぞったかと思えば、次の瞬間には太ももの内側を抉るように指が走り、また次の瞬間には、腕をねつとりと撫でる。

「ああ……っ！ やめ……そこ、ひ、ああっ！ どこ、なにを……っ
！」

意識があちこちに飛ばされ、スノウは自分の身体のどこを、どう守ればいいのか分からず、混乱する。

上を警戒すれば下が暴かれ、下を意識すれば首筋を指が這う。

逃げ場を失ったスノウの意識は、ルドの掌の上でバラバラに解体されていくようだった。

「んん……！あああッ！」

あまりの刺激に、スノウは狼の魔物の腕の中でガタガタと震えることしかできなかった。

「……可哀想に。パニックになっっているんだね。自分の身体がどんなに淫らなりズムを刻んでいるかも分からなくなっているみたいだ。」

ルドは満足げに目を細め、混乱の極致にあるスノウの銀髪を髪を

梳いた。その手がスノウの真つ赤になった耳を掠める。

「……や、めて……耳、だけは……っ、変な声が出ちゃうから、やめて……ッ！」

パニックの真つ只中、スノウは潤んだ瞳で、なりふり構わず叫んだ。

普段のスノウなら、それがいかに悪手か理解できた。しかし、この時のスノウは敵に捕まり、未知の感覚を与えられ続けて思考力が奪われていた。

スノウのその言葉を聞いた瞬間、ルドの瞳には獲物の弱点を見つけ出した捕食者の悦びの色が宿った。

「ふうん……。耳がそんなに弱いんだ？」

ルドの声が、一段と低く、愉悅に震える。

スノウが後悔する暇もなく、ルドはスノウの耳元へ顔を近づける。

「……自分から教えてくれるなんて、本当にいい子だね。」

「ひっ……。あ、あああッ！」

次の瞬間、熱い舌先がスノウの耳の縁を、じりじりと這うように舐め上げた。

「あああッ！だめって……いったのに、あ、はあっ、んんッ！」

ルドはスノウの悲鳴など聞こえないかのように、今度は耳たぶを口内に含み、甘噛みするように執拗に食んだ。コリッ、と軟骨が鳴るような圧迫感と、神経を逆撫でするような吸着音。

「っ、ふ、あ……あ、あああ！やだあっ！」

耳元で直接響く、クチュ、クチュ、という生々しい淫らな音。

叩き込まれるその音とルドの舌の熱く濡れた感触からスノウは首を傾けて逃げようとする。その瞬間、ルドの左手が、スノウのうなじをがっしりと掴んで固定し、逃げ場を完全に塞いだ。

「ねえ、スノウ。君の言った通りだ……。耳を少し責めるだけで、君の氷の殻は、こんなに簡単にドロドロに溶け出してしまう。」

スノウがやめて、と悶えるたびに、ルドはわざと耳の穴に熱い吐息を吹き込み、さらには舌先を細かく震わせて奥を突くような真似を繰り返す。

「……あ、あ……ああ……っ、ん、ん……ッ。」

もはや拒絶の言葉は紡げず、ただルドが耳を弄るリズムに合わせて、甘ったるい嬌声がスノウの唇からこぼれる。

「そんなに可愛い声を出して…君が一番守るべきところまで、もう

とろけてしまっているんじゃないかな？」

布地の上からルドの指がスノウの熱く秘められた中心を撫でる。

「あっ！……そこはっ！」

「ほら、ここ……人間の女の子が一番ダメになる場所。こうしてコリコリつてしてあげると……」

「ううっ！ああっっ！」

お腹の中が甘く痺れ、ルドに弄られている恥ずかしい場所を熱く潤わせてしまう。

「ははっ！いい声だね。いいよ、このままイかせてあげる。」

ルドはそう言うと、自分の魔力をスノウのコスチュームに僅かに流した。それだけでスノウの一番大切な場所を守っていた布地が溶かされてしまう。

「……！？嘘でしょ！やだっ！お願い、やめて！」

自分の雌芯が外気に晒されたのを感じて、スノウは悲鳴を上げた。魔法少女の衣装は本来なら簡単に脱がされたりしないはずだ。

しかし相手は魔族の幹部。その邪悪な魔力は魔法少女の聖なる加護を簡単に破ってしまう。

ルドは守りを失ったスノウの敏感な花園を直接責め立て始めた。

まずは花芯の周りを円を書くようにじわじわと。

「んんん！」

じん、とした痺れが走って声が漏れる。背中が反って思わず狼の胸板に自分の身体を押し付けてしまう。

それから、ピンピンと弾くようにしてスノウの蕾を虐めた。

「あつ、あつ！はうう…！」

それから二本の指でスリスリと捏ね回す。

「きやううッ！」

ルドの魔法少女を壊すことに慣れきった、あまりにも巧みな指遣いにスノウはただ翻弄される。

「もう、やめてッ！おかしくなる！」

「いいよ、気持ちいいことで頭を真っ白にして、早く一人の人間のメスになってよ。」

ルドの低く甘い声がお腹まで響いて、スノウの聖域がまたとろけてしまう。

（ダメ…これ以上、そこを触られたら…!）

「そろそろナカもほぐしてあげる。ほら、力を抜いて…、」

「……い……」

ルドの指が無遠慮にスノウのナカに入り込もうとした瞬間、スノウの中で、これ以上触れられないという嫌悪感と自分を樂しげに舐めるこの男への怒りが爆発した。

「……い、いい加減にして！！」

スノウは叫んで自分を中心にふり構わず冷気を解き放った。

「！！」

ルドは瞬時にかわしたが、スノウを捕らえていた狼は凍りつき、砕け散った。

狼の魔物の腕から解放されたスノウは、地面に手をついて、肩で大きく呼吸する。

さつきまで散々ルドに弄ばれた場所がまだドクドクと脈打っている。

不意にスノウの耳に聞こえてきたのは手を叩く音。思わず顔を上げると、ルドが笑いながら拍手していた。

「ハハッ！最高だよ！スノウ！あそこまで追い詰められた状態で、こんなに強い魔法を放つなんて！」

ルドの瞳に陶醉したような光が宿る。その光を見た瞬間、スノウの背筋が凍りついた。

この魔族の獲物として今この瞬間、自分が選ばれた。それを察知したからだ。

「……決めたよ、スノウ。君がどんな風に汚れて、どんな風に泣い

て、最後にはどんな音を立てて壊れるか……僕がじっくり、一番近くで見守ってあげる。」

「……っ！バカにしないで！私はあなたの玩具じゃない！そうなる前に私があなたを倒す！」

スノウは本気でそう言ったのに、ルドは飼った猫が甘噛みしてきたくらいのことにはしか感じていない様子だった。

ルドは瞬時に、音もなくスノウに近づくと耳元で囁いた。

「ねえ、スノウ。その氷、いつまで持つか……？君の理性が、僕の指先でドロドロに溶かされる瞬間が楽しみだよ。」

スノウは咄嗟に顔を真っ赤にして耳を抑える。

ルドはふつと笑ってスノウから離れた。

「またね、スノウ。僕が君に刻んだその熱が消える前に会いに行くよ。」

ルドはその言葉を最後に姿を消した。

残されたのは、静寂と、スノウの身体から消えない卑猥な熱だけだった。

第二章 魔族幹部ルド

「スノウ、それは最悪だ。いや、最悪なんて言葉じゃ足りないかもしれない！」

スノウの相棒、パウが青ざめた顔で言った。

魔法少女たちの隠れ家、スターライトネストの一室。目の前では、魔法少女フローラ、スノウの親友の萌木が規則正しい寝息を立てている。

「そんなに、あのルドって幹部、危険なの？」

自分の姿を捉えて離さなかったあの緑色の目が忘れられない。スノウは自分を抱きしめるようにしながら、パウに尋ねた。

「あいつは…魔族幹部の中でも特に関わっちゃいけないやつだ。別名、『魔法少女喰い』と呼ばれてる。気に入った魔法少女を徹底的に追い詰め、最後には壊してしまう恐ろしい魔族らしい。過去に狙われた魔法少女がどうなったか、その噂は生々し過ぎてボクの口からはとても言えないよ…」

「そんな…！ねえパウ、私、どうしたらいいの？」

「あいつは強力な魔力を持ってる。君一人で立ち向かうのは無謀だよ。ボクが他の精霊たちと会ってあいつのことを調べてみる。スノ

ウ、だからそれまではできるだけあいつから逃げて、耐えて欲しいんだ。」

パウは精霊。魔族に魂を奪われた人たちの、これ以上犠牲者を出したくないという願いの結晶だ。いつもスノウに的確なアドバイスをくれるが、今回ばかりはパウもすぐに解決策を示せないらしい。

「…分かった。」

スノウはぎゅつと胸の前で手を握りしめて頷いた。



翌日、大学の授業を終え、友達と別れたスノウは待ち合わせ場所の大学のカフェテリアへ向かう。放課後の学生たちで賑わうカフェテリアの中、見慣れた背中を見つけてスノウは声を弾ませる。

「冬也くん！」

「雪花！」

冬也の優しい笑顔にスノウの胸の中が温かくなる。冬也は高校からの同級生で、密かにスノウが思いを寄せていた相手。告白してもらった時、夢かと思うほど嬉しかった。

「じゃあ、行こうか。」

そう言つて冬也は手を差し伸べる。

「うん！」

スノウは頷き、冬也の手を握つて歩き出す。幸せな、いつもの二人の時間の始まりだった。

窓から柔らかな日差しが差し込む冬也の部屋。並んで座る二人の距離は、吐息が触れ合うほどに近かった。

「雪花、何かあつた？ 今日、顔色が悪い気がする。」

冬也が心配そうに眉を下げ、スノウの頬を優しく撫でる。その指先は、ルドの官能を無理矢理引きずり出すような触り方とは全く違う。ただ相手を思いやる温かさだけが伝わってくる。

（大丈夫、私には冬也くんがいる。あんな男に何をされたって、私の心までは汚されたりしない。）

「ううん、特に何もないよ。」

スノウは笑って答えたが、声が少しだけぎこちなくなってしまうた。

「それならいいんだけど。何かできることがあつたら言ってね。」

「うん、ありがとう。」

スノウは冬也の温もりに触れたくて、冬也の肩に自分の頭を預けるようにして寄り添った。

「冬也くん、キスして…。」

あんな男のことなんて早く忘れたい。スノウは冬也の口づけを待つようにそっと目を閉じた。

冬也の顔が近づき、清潔な石鹸の香りが鼻腔をくくすぐる。重なり合う唇。冬也のキスは、壊れ物を扱うかのように控えめで、慈愛に満ちていた。

「…雪花。」

冬也がキスを深めようとスノウの耳元に触れた瞬間。

「……っ！？んんっ！！」

昨日、執拗にルドに愛撫された感覚が蘇ってくる。

耳の縁を喰まれて熱い息をかけられて、奥まで蹂躪されたあの疎ましい、それでいて確かな快楽を孕んだ感覚。

身体が勝手に、ルドの舌の動きを思い出したかのように、ビクンと大きく跳ねてしまう。

「……？雪花？……どうしたの、今……。」

冬也が驚いて手を止めて唇を離す。スノウはすぐに答えることができなかった。

（冬也くんは、優しく触れてくれただけなのに。どうして、私の身体はあの男の、あの最悪な触られ方を思い出してしまったの？）

「……なんでもない。ちよつとびつくりしただけで……。」

苦し紛れの言い訳をするが、冬也への罪悪感で胸がいつぱいになる。

「雪花……やっぱり何かあった？今日、少し変だよ。」

冬也はそう言つてスノウの目をじつと覗き込む。それから安心させるように雪花を抱き寄せようとした。

冬也の手が腰をなぞった瞬間、スノウはまたひやつ！と声を上げてしまう。

「……雪花？」

冬也は身体を離し、怪訝そうにスノウを見る。

「……ごめん、冬也くん。私、用事を思い出しちゃつて。今日は帰るね！」

「えっ？もう帰るの……！？」

引き止める和真の声を振り切るように、スノウは冬也の部屋を飛び出した。

（最悪だ。冬也くんは本気で心配してくれていたのに、逃げるようなこととして……嫌われたかもしれない。）

夕闇に包まれた街路を、俯きがちに歩くスノウは気が付かなかった。少し離れた建物の屋上に、優雅に腰を下ろした男が一人。その瞳が、獲物を追う猛禽類のように自分を捉えていることに。

「……ふうん。驚いたな。あんなにウブな反応を見せていたのに、恋人がいたなんてね。」

その男、ルドは自分の黒髪を弄びながら、冬也がいる方向に視線を向ける。

「彼氏、か。……弱くて凡庸な、つまらなさそうな男だね。」

ルドは低く笑い、スノウが去っていった暗がりに向かって、呪いのような言葉を落とした。

「でも可哀想に、スノウ。あんな退屈な男じゃ、もう君は満足できなくなるよ。……だって僕がこれから女の子の悦びを徹底的に教え

込んであげるから。」

闇に溶けるようにルドの姿が消え、後には冷たい風だけが吹き抜けた

第三章 逃げ場のない抱擁

夕暮れ時の人気のない並木道。冬也との穏やかな時間を終えて、スノウは一人、帰路についていた。

（今日はいつも通りに過ごせて良かった。昨日のことも謝れたし。）

スノウがそんなことを考えながら歩いていると、視界の隅で、ふわりと見覚えのある白いシルエットが動いた気がした。

「パウ……?」

スノウがそう呟いた瞬間、木の影から飛び出したのは、スノウの相棒パウにそっくりな、巨大なシロクマのぬいぐるみだった。しかし、その大きさはゆうにスノウの背丈を超え、どこか虚ろな目をしている。

パウに似た、ふわふわな毛並みのそのぬいぐるみは音もなくスノウの背後に回ると、その太く柔らかい腕で、スノウの胴体を両腕で抱きしめた。

「…！？これ、魔物！」

触れられて初めて、スノウはそのぬいぐるみから魔物の気配をは

つきりと感じ取ることができた。

耳にいつもつけている変身道具、雪の結晶の形をしたピアスに魔力を流すと、真っ白な光が弾けて魔法少女スノウの姿に変身した。

「……あはは、そんなに驚かなくてもいいのに。その子は君のことが大好きなんだよ。……ねえ、スノウ？」

ふと、ひどく楽しい声が響いた。スノウが声が聞こえた方向に視線を向けると、魔族幹部ルドが手をひらひらと振りながら立っていた。

「やあ、スノウ。喜ぶかなと思って君の相棒そっくりの魔物を作ってみたよ。気に入ってくれると嬉しいんだけど。」

「ふざけないで！パウに似た魔物に私を襲わせるなんて……！」

スノウは魔物の腕から逃れるために、右手で魔物の胴体に触れて、その身体を押し返そうとした。しかし、その瞬間、スノウの腕がずぶりと、ぬいぐるみの内部に沈み込んだ。

「えっ、なんで？」

スノウは慌てて引き抜こうとしたが、ぬいぐるみは柔らかすぎて、水の中でもかくように、どこにも力を加えられる場所がない。スノウの右腕は指先から肘まで、すっぽりとぬいぐるみの内部に包まれてしまった。

「それなら凍らせて、中から壊せば……！」

スノウが右手に魔力を集中させた瞬間、ぬいぐるみの内部で綿が蠢き、スノウの腕を撫で始める。複数の綿の触手が柔らかく、しかし甘い痺れを引き起こすような触れ方でスノウの指先や肘を撫で回してくる。

「……ひやつ……何？中で何か動いてる！」

「ははっ！その子の体は普通の綿じゃなくて、捕まえた子を飲み込んで絡みつく、特製の魔綿で出来てるんだ。一度飲み込まれたら抜け出すのは、まず不可能だよ。」

「やだっ！ 抜けない！」

スノウが魔法を放とうとするたびに、綿はスノウの敏感なところに触れて邪魔をしてくる。

投げ揃うように指先を撫で、手首をくすぐり、肘に吸い付く。

「離して！」

「そんなに暴れなくても、その子は君を傷つけたりしない。大人しくしていれば君を際限なく気持ち良くしてくれるよ。」

確かにこの魔物には攻撃力がない。いわばスノウを捕らえて快楽

を与えるためだけに生み出された魔物。そんなものを魔族の幹部が作り出す。その事実がひどく気味が悪かった。

「んっ！やだっ、出して！」

ルドはもがくスノウに歩み寄って、スノウの頬を手で優しくなぞった。

「ぬいぐるみが気に入らない？なら僕が直接触ってあげる。」

（やめて！冬也くんと同じ触り方しないで！）

ルドはの手はそのまま、この前散々弄んだ、スノウの耳朶へと、

ゆつくりと伸びていく。

「ほら、ここ：この前君がよく鳴いた場所。」

「嫌っ！触らないで！」

スノウは咄嗟にルドの手から逃れるように身体を動かした。

その瞬間、スノウの右肩と右の脇腹がぬいぐるみの中に吸い込まれた。

「…しまった！」

「ん？やっぱりその子の中が気持ちいいのかな？自分からさらに深

く沈み込むなんてね。」

ルドはそう言ってわざとらしく肩をすくめてみせる。

ぬいぐるみの魔物は新たに取り込んだ場所に触手を伸ばす。右腕だけでなく、肩、そして一番敏感な脇腹までもが、熱を帯びた魔綿の抱擁に飲み込まれていく。

「あ……っ、ひうんっ！や、だ……ッ、そこはっ！」

綿の触手が脇腹を撫でた瞬間、スノウの肩が大きく跳ねる。

ビクッ、ビクッと、ぬいぐるみの腕の中で身体を跳ねさせるスノウの姿は、まるで獲物を締め上げる蛇に身を任せる小鳥のようだった。

ルドはあえてスノウに触れるのをやめて、スノウが自滅していく様を、愉悅に浸りながら見つめていた。

「いいね、このまま全部飲み込まれちゃいなよ。」

スノウの身体が跳ねるたび、少しずつスノウの身体はぬいぐるみの中に沈み込んでいく。

「やめてっ！脇腹ばかり！ひうつ！ああっ！」

ぬいぐるみの魔物はスノウの脇腹が敏感なことを探り当てると、そこばかりを執拗に撫で始める。

（ダメ！このままじゃますます取り込まれる！）

スノウは必死に身体の動きを止めて、これ以上ぬいぐるみの内部へ飲み込まれるのを避けようとする。

顔は真っ赤。口からは鼻にかかったような声が絶えず出てしまう。

「なるほど、賢い選択だ。動かなければ、それ以上は飲み込まれない、そう思っただよね？」

スノウが動きを止めたことで、確かに侵食は止まった。

しかし、すでにぬいぐるみの中に吸い込まれた場所は絶え間なく執拗に触られている。

（長くは持たない。ぬいぐるみの外にある左手に魔力を集めて…
！）

スノウの左手が真つ白な光を帯び始める。

「でも、残念。その子は君の魔力に反応して動くんだよ。」

スノウが左手に魔力を込めた瞬間、ぬいぐるみの中から新たな綿の触手がゾロゾロと這い出してきた。それらは凍らせる隙も与えず、スノウの左手に、まるで蛇のように絡みつく。

「あ……ッ！？」

絡みついた綿は、指の隙間や掌をワサワサとくすぐるように撫でる。スノウが魔法を放とうとすればするほど、そのエネルギーは綿に吸い取られてしまう。

（魔力に反応して邪魔をされる！こんなの抜け出す方法が……。）

「いつまでじつとしていられるかな？君の耐久力を見せてよ。」

ルドはそう言い、スノウの左脚の太ももに手を置いた。そのまま、指先をミリ単位で、ゆつくりと、スノウのスカートの奥へと潜り込ませていく。

「…っ！あっ…やめて！」

触れられたくないという生理的な嫌悪、ゾクゾクとする感覚、くすぐったさ、全てが身体を動かしたいという衝動へとつながる。

「…動いちゃダメだよ？動いたら、もつと深く飲み込まれてしまふからね。」

動けば魔物に貪られ、耐えればルドの指に暴かれる。スノウは最悪の状況に追い込まれていた。

（動いちゃダメ！動いちゃダメ、なのに……！）

ルドの指はジリジリと上ってきていて、取り込まれた腕や肩や脇腹は、魔物に獲物を弱らせるかのようにしつこく撫でられる。

「やつ、ふんんッ、くっ！」

スノウは必死に震えそうになる身体を押さえ込んで堪えた。

「ははっ、頑張るね。ねえ、スノウ。今の君は冬也くんの彼女？それとも僕の魔物に抱かれて啼くだけのただの女の子かな？」

「…！？なんで、冬也くんのこと、知ってるの？」

「気に入った子のことはなんでも知りたいからね。ちよつとだけ放

課後の君の様子を見てたんだよ。」

「冬也君には、手を出さないで！」

「心配しなくてもあんな人間に興味ないよ。僕の興味の対象は君だけだ。でもさあ、スノウはあんな退屈そうな男で満足できるの？」

「冬也くんのこと馬鹿にしないで！」

スノウがルドとの会話に気を取られた瞬間、ルドは指先をスノウのスカートの奥、一番熱を持っている場所へと這わせた。爪を立てるか立てないかの絶妙な力加減で、産毛を逆立たせるように。

「…ああッ！」

油断した隙に感じざるを得ないような、的確な触り方をされて、スノウは大きく腰を跳ねさせてしまった。

「あーあ、残念。動いちゃったね。ほら、また沈んだ。」

ぬいぐるみの魔物は待っていましたとばかりにその柔らかな身体を広げ、スノウの背中から腰のラインを完全にその内部へと引きずり込む。

「ひ、ああっ！背中、が……腰、も……っ、なにか、蠢いて……んんっ！」

スノウの背後では、数え切れないほどの綿の触手が、スノウの背骨を一つずつなぞるように、そして腰のくぼみを埋め尽くすように、じりじりと、執拗に這い回っている。それはまるで、スノウの身体を隅々まで味わい尽くそうとする舌のようだった。

「ふふつ、背中を丁寧に撫で回されるなんて、冬也くんとの抱擁じや味わえない刺激だろう？」

ルドはそう言いながら、ぬいぐるみに飲み込まれ、逃げ場を失って突き出されたスノウの秘められた場所に視線を注いだ。

スノウはぬいぐるみが与える過剰な刺激に翻弄されながら、ルドがそこを見ていることに気がついて叫んだ。

「そこはダメ！」

ルドの緑の目が楽しそうに細められる。

「そう言われると、どのくらいとろけてしまっているのか、確かめたくなるな。」

「ダメって、んっ！」

ルドはスノウの制止など聞こえていないかのように、服の上からスノウの熱く濡れた花園に指を置いた。

「服の上からでも分かるよ。もう、トロトロになってるね。」

ルドは指を動かすことはせず、ただその敏感な突起を押さえていく。

「知ってるよね？君の相棒は僕らに魂を奪われた人間たちの無念の結晶だって。それなのに当の魔法少女は、その相棒にそっくりな魔物に取り込まれて、気持ち良くなつて、こんなに蜜を溢れさせて……精霊たちはさぞ悲しんでるだろうね。」

「んんっ！！言わないで！」

痛みならまだいい。しかし、敵に快楽を与えられて、魔法を放つ

ことすらできないほど追い込まれているというこの状況。それは、精霊たちの願いを背負って、魔族と戦う使命を負った魔法少女であるスノウにとって何よりの屈辱だった。

ルドはスノウの蕾の表面をなぞるように指を軽く動かす。決して強くはない刺激だったが、スノウを追い詰めるには十分だった。

これ以上触れられたくない。そう思ったスノウは反射的にルドの指から逃げるように身体を動かしてしまう。

そして、一番守るべき敏感な場所を飲み込ませてしまった。

「いや！ まって… そんなに、やだッ！」

ぬいぐるみはスノウの最大の弱点を取り込んだことに歓喜するよう
に、スノウの小さな突起を捏ね、擦り、押しつぶす。

「ははっ！自分からそこを差し出すなんて、よっぽどその子に可愛
がられたかったんだね！」

ルドの高笑いが、夕闇の並木道に響き渡った。

スリスリ、カリカリ、ぬいぐるみ魔物はどの触り方が一番獲物を
弱らせられるのか、触れ方を変えて試し始める。

「ひあああッ！」

スノウは秘められた場所からとめどなく蜜を溢れさせ、触手の動きを滑らかにしてしまう。

そろ、そろと弱くゆつくりと触手に撫で上げられた瞬間、スノウはビクツと身体を大きく跳ねさせた。

「あ、あん！その触り方、やだっ！」

「ふうん、優しく撫でられるのに弱いんだね。ほら、裏側も同時に撫でてあげて。」

ルドの指示を聞いた魔物は、前からも裏からも優しく、ゆつくりとスノウの蕾を撫で始める。一撫でごとにスノウはお腹をキュンと

締め付けてしまい、それと同時に、何か、身体の奥から熱いものが込み上げてくる。

「ひやつ！……なに？なにか、熱くて……変な……。」

「いいよ、スノウ。そのまま果てて見せてよ。」

「あ、あ……っ、ああああああッ！！！」

スノウの身体が、巨大なぬいぐるみの腕の中で激しく、壊れた人形のように痙攣した。

外に出ている顔は屈辱と快感で真っ赤に染まり、焦点の合わない瞳は潤んで口元からは締めりのない吐息が漏れ出す。

「はあつ、はあつ……！」

（なに？今、頭が真っ白になって、身体全体を電気が走ったみたいになって……）

「今イッたね？初めてだった？」

「いく？そんな、ひんん！」

初めての絶頂でまだ痙攣しているスノウの身体。しかし、その余韻に浸る暇も与えず、次を求めてぬいぐるみの魔物は責め立てる。

「あああッ……！もう、いやあ……。」

（嫌だ！もう気持ちいいの、やめて！）

スノウの心が拒絶や嫌悪でいっぱいになった瞬間、スノウの胸元から白い光が溢れ出した。

「無駄だよ、魔力は吸収されて……ん？」

スノウが放った凍てつくような魔力は即座にぬいぐるみの綿に吸収される。しかし、その魔力量はぬいぐるみの魔物の許容量を超えていた。吸いきれなかったスノウの魔力が綿をピシ、ピシと音を立てて凍らせ始める。

危険を感じた魔物は、スノウの蕾をさらに激しく責め立てる。しかしそれが逆にスノウの抵抗を強くする。

「……いやああああ！」

スノウは叫んでさらに強力な魔力を解き放つ。ぬいぐるみの魔物は完全に凍りつき、その動きを停止した。そのままヒビが入っていき、魔物は粉々に砕け散った。

「あつ……！」

支えを失ったスノウはそのまま地面に倒れ込む。

「あはは……！あははははッ！！」

砕け散ったぬいぐるみの魔物の破片や凍りついた綿が雪のように舞い散る中で、ルドは笑い声を上げた。

頬を紅潮させ地面に這い蹲りながら、それでも折れていない、スノウの水色の澄んだ瞳を見つめ返す。

「素晴らしいよ、スノウ！全身を僕と魔物の愛撫でドロドロに溶かされて、あんなに無様に啼いていたのに、あんな状態でこれほどの冷気を放てるなんて、流石は魔法少女だ！」

スノウはふらつく足で立ち上がる。周囲の気温までも下がり、スノウの吐く息も白くなっている。

ルドはゆつくりと、スノウの方に歩み寄った。

ルドはそのままスノウの耳元に顔を寄せ、凍てつく空気さえも甘く溶かすような囁きを落とす。

「……今日はこれくらいにしておいてあげる。君が可愛く絶頂しちゃうところも見れたしね。大好きな冬也君のところへ帰るといいよ。」

ルドの低い声がスノウの腰まで響く。散々弄ばれたスノウの身体は、その声を聞くだけでこぼりと蜜を出してしまう。

「またね、スノウ。今度は君の大学にでも遊びに行こうかな。」

ルドはふつと笑って、それから姿を消した。

「…大学にまで、来るつもりなの？」

すっかり日が沈み、薄青い闇が空を包み始める中、残されたスノウの声が、夕闇に吸い込まれていった。